
MOON-4 夜叉 3 < 1 9 >

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 3 < 19 >

【Nコード】

N0904N

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

全ての謎を解くため、再び新宿へと戻った裕希。そこで、記憶を失った秀と出会う。

MOONシリーズ第4弾『夜叉 3』第2話です。

1・君がいない - 2 (前書き)

いよいよ核心に迫ってきました。

1・君がいない - 2

夜も遅く寝静まる頃、裕希はその部屋へ入った。

「たぶん、桜の事だ。俺を襲って来ても殺そうとはしないだろう。」

「
シングル・ルームの白いベッドに制服のまま寝っ転がり、天井を見上げる。」

『駄目だ、裕希!』

あれは確かに和人の声だった。

「でも、どうして」

左向きになり、「秀さんは俺を連れ去ろうとしたんだろう……あれは、秀さんじゃない。和人もどうして生きてるなら姿を現してくれないんだろう。」

そして、朝子はどうなったのだろう。

そんな事を考えているうちに、昼間の疲れが出たのか、微かな眠気を感じた。

念のため、『それ』を枕の下にいれ、そのまま眠りに落ちる……

刹那。

ガシャン………!

「!」

飛び起きると窓ガラスが割られていた。

素早く枕の下に入れたばかりの、ジャック・ナイフを取り出し、

「誰! 秀さん! ?」

「人だ。」

「いい血を持っている。」

広い室内に紅の灯りが集った。

ヴァンパイア
吸血鬼たちだった。

「新宿にいれば、和人や秀さんの情報が入ると思ってたけど」

ナイフを眼前にかざし、「お前たち九桜の側か？和人の一族か？」

裕希は叫んだ。

が、彼の言葉を見殺して5人程の吸血鬼が裕希目指して突進してくる。

「やめろっ！」

目を細め、左手のジャック・ナイフを一人目の胸に突き立てる。

「うあーっ！」

迸る『闇』の血。

裕希は傍らの椅子を投げ、他の吸血鬼を攪乱させた。

手に当たる室内の物を全部闇の者へと投げ、自分は割れたガラスの前に立つ。

ここは12階。

裕希もそれは承知だった。

（もし、あの時の声が本当に和人なら）

裕希は思った。（俺が和人の『記憶』を共有しているのなら、何か『策』があるはずだ。）

「もう一度聞く。」

裕希は背後から風を受けながら、「今、お前たちの『帝王』は何処にいる。本当に人の血を求めるのであるのなら、それは九桜の一族だろう。」

「・・・」

一斉に、吸血鬼の行動が止まった。

裕希は目を細め、

「お前たちが知っている事を全て俺に話すんだ。それで、お前たちの本当の『帝王』を俺が取り返して見せる。人の血を頼らなくと

もその帝王^{エナジー}の血で飢える事なく闇に生きる事を約束する。」

そして、右手の指先をナイフで少し切る。

一筋の血が、暗い床に滴る……

「これは『光』と『闇』との『契約』だ。」

裕希の口調は三か月前と比べて、大人びたものだった。「決して超えてはならない、『光』と『闇』との契約。もし、この血が欲しければ、お前たちが知っている事を全て話せ。」

いつもと違う雰囲気^{ヒト}の裕希だった。

吸血鬼たちの間に、どよめきが起こる。

「この血は……」

一人の男性の吸血鬼が呟く。「この血を我らは飲んではならない。」

「そう、この子に何かあったら帝王が……」

続いて女性^{ヒト}が何かを恐れる様に言った。

「この血は……触れてはならない。」

静まり返る室内。

「何か」

裕希は彼らに問いかけた。「知っているんだね。『帝王』を蘇らせる何かを。」

「……帝王を」

一人のサラリーマン風の男性が言った。

「帝王を『復活』させるのは、『帝王』の……」

と、言った時、既にその吸血鬼は裕希の背後から突如飛び込んだ。一陣の風に四肢を引き裂かれていた。

「……」

裕希は、その風を避けた。

が、次の瞬間にはその『風』に抱かれ、中空高く飛翔していた。眼下に新宿御苑が見える。

裕希を抱いた『風』は、秀だった。

「秀さんっ！」

裕希は振り返り、「どうして・・・」

「お前に何かあったら困るからな。」

秀は無表情にそう言った。「無茶な事をする奴だな。」

「・・・って秀さん。」

裕希は目を丸くし、「思い出したの？俺たちの事。」

「何の事だ。」

秀は相変わらずの口調で答える。

それを聞き、裕希は秀の両腕の中で暴れた。

「秀さんの無責任っ！大食いっ！桜の所で何かあったんでしょ！俺を救ったのも桜の命令だろ！」

必死に両腕を離そうとする。

秀は裕希と共に、御苑の一角に舞い降りた。

と、同時に裕希は秀を突き放し、

「何で思い出してくれないの！一緒に暮らしてたじゃん、和人と朝子さんと俺と！」

「・・・」

紅の光を帯びた闇の目で秀は、「知らないね、俺はいつでもフリ
ウルフ・ガイ
の狼男だ。」

「薄情者！」

裕希は怒鳴って秀の頬を打った。

「痛っ！」

「これが最初で最後のぶっ叩きだからね！俺は朝子さんと和人の
このまち
事守るために新宿へ戻って来たんだ。桜なんかには捕まる為じゃない
！」

「人間の子供がよく言うよ。」

秀は叩かれた頬を撫でながら、「人間如きに何が出来るっつー訳
？陽の下をのうのうと生きてるだけじゃないか。」

「そんな事ない！」

裕希は反論した。「確かに秀さんみたいな『闇』の人には適わな
いけど、人は誰かを愛したり、守ったり、大切に思う心を持ってる

んだよ。」

そして、「秀さんもその心、ちゃんと持ってた。『Office To One』の人ともそうだし、何より秀さん、秀さんには和人がいたでしょ！和人を『帝王』としてだけに生きるって生き方変えたのは秀さんでしょ！」

「和人………」

その瞳が――一瞬、和らいだのに裕希は気付いた。

「思い出してよ、和人の事！」

裕希がそう言った瞬間、

ガウンツ………

一発の銃声が闇を切り裂いた。

と、同時に秀が右肩を押さえてバランスを崩す。

裕希には何が起きたか一瞬判らなかった。

「秀さん！」

裕希は秀に近づこうとした。

が、

「裕希くん、動くな！」

聞き覚えのある声が彼方から聞こえてきた。

「………こいつ。」

秀は右肩を押さえて振り返った。

僅かな街灯の下、そこには拳銃を構える早坂の姿があった。

「動くなよ、尾崎秀久。」

そう言い、「さ、裕希くん、こっちへ。」

自分の方へと彼を促す。

「早坂さん！」

裕希は一瞬戸惑った。しかし、再度、

「早く、裕希くん！」

彼に促され秀の側を離れた。

「ごめん、秀さん！俺、今秀さんや桜に捕まる訳にはいかないだ。」

早坂の元へと走り寄る。

「必ず助けに行くから、秀さんっ！」

「それは、こっちの台詞だ。」

秀はそう言うのと天空高く飛翔し、「朝子のキリマンでも飲んで待ってるよ、篠原裕希。必ず迎えに行くからな。」

「待てっ！」

ガンッ……

銃声がもう一つ響いた。

「やめて、早坂さんっ！」

裕希は彼の両手に飛びついた。

「どうして？」

早坂は目を丸くした。「あいつは君を殺しに来たんだろ？」

「違うんだよ、早坂さん！」

裕希は訴えた。「秀さんはね、和人が桜にやられた時に何らかの術を付けて記憶を失ってるんだ！」

「記憶を？」

早坂は怪訝そうな顔をした。「何でまた……」

「判らない。」

裕希は首を振り、「何かあったんだ……あの夜櫛に傷つけられて、そして目の前和人を失って」

早坂を見つめる。「その隙について桜が秀さんに何かをしたんだ。今だって殺そうと思えばすぐに殺せたのに、秀さんはそうしなかった。」

「成程ね。」

グレーのスーツ姿の早坂は溜息を付き、

「……確かに、殺そうと思えばあの君のお父さんのホ

テルで殺せたし、第一学校を出た所でも彼なら殺せたはず……君
がいう狼男ウルフガイならね。」

「でも」

裕希は不思議そうに、「何で榊じゃなくて秀さんを俺に襲わせた
りしたんだろう。」

「『凶悪犯人』のよくやる技さ、裕希くん。」

早坂はニヤリと笑い、「相手により大きなダメージを受けさせる
為、って奴。」

「あ！だから、榊じゃなくて一緒に暮らしてた秀さんなんだ！」

裕希は秀が飛び去った先を見つめた。

「桜……一体、俺たちをどうしようとしてるんだ。あれだけの
目に遭わせてまだ何か『欲しい』ものがあるのか………！」

彼が見つめる先は、半月の月。

1・君がいない - 2 (後書き)

続けての読者さま、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0904n/>

MOON-4 夜叉 3 < 1 9 >

2010年10月15日21時11分発行